

たくさんの「あたりまえ」

海外・早稲田大学系属早稲田渋谷シンガポール校 2年 小野 たえ

コンビニやスーパーで買物をする時にお釣りが出ることがあると思うのだがその時に金額をごまかされたことがあるという人は日本ではほとんどいないだろう。私もそのような経験は一度もない。これは日本という国を的確に表現している現象だと私は考える。父親の仕事で私はインドに約3年滞在したのだが、店で会計の際に金額とレシートとお釣りをしっかり確認しないことには店を去ることができなかった。さすがにデパートなどのようなところでお釣りをごまかされるようなことは起きないけれど、地元のスーパーなどでは日常茶飯事なのである。普段、何も考えずに行っていることが実は日本特有だったり、日本だからこそ実現していることが海外に出たこの5年間で日本を客観視するうち多く見つけた。

先にも書いた通り私はインドで中学校生活を送った。もちろん父親の転勤である。小学校6年生の終わりのころ、夕食後に4歳年下の妹と私が父と母に話があると呼ばれて4人でテーブルを囲んだ。転勤族な一家だったためなんとなく引っ越しの話だと勘付いていた私だったが、いきなり父親に地球儀をもっておいでと言われた時は面食らった。インドに転勤が決まったと父親の口から聞いた時、涙と一緒に笑いが止まらなくなってしまった。何を意味する涙と笑いなのかは覚えてはいない。ただ5年前の私はインドと聞いて漠然とただ象とカレーとガンディーしか想像できなかった。飛行機で7時間飛んでデリーに着いた時、疲れきっていたこともあって唯一感じたのは暑さだった。後に日本人学校の友達とインドの第一印象について話した時に「最悪」や「汚い」とか「くさい」などがあがっていたのに比べて私が全くそのようなことを感じず、言われて初めて「確かに汚いくさいな」と思ったので私は鈍いのかもかもしれない。

しかしそんな私でも数々の驚くようなことがあった。まずは、道路に牛がいることである。何も牧場から逃げ出した牛なのではなくて、ヒンドゥー教では

牛は神様の乗り物とされているから捕まえることもできずに野放しにされている純野生の牛なのだ。それも田舎限定ではなくて首都デリーの幹線道路にもたくさんいるため、いつどこで渋滞が起きるかなど予想もつかない。ここにも日本との相違が見られる。たしかに道路に牛がいる時点ですでに違うのだけれど、インド人がいかに宗教を重んじているのかがわかるだろう。神様が乗る乗り物が日本にはないにしろ、野生の動物がいたらどんな象徴だろうと保護するのが日本である。

また日本ではクリスマスをお祝いし、神社に初詣にいき、結婚式は教会で挙式し、お葬式はお寺で行うなどという海外から見たらとんでもないことをしているのだが、私達からすれば普通のことだ。我々日本人はほとんどの人が無宗教という立場をとっているため宗教上での争いはほとんど起きていない。それは島国という閉鎖された土地で限定された民族しかいないということと、その島国限定の穏やかな人柄であるがゆえのことだとも私は考える。本当にこれは素晴らしいことなのだ。インドにいた3年間で知った。インドでは土地争いに宗教が絡み、国際的な戦争だけでなく国内でも紛争が起きている。日本でも領土問題は抱えているものの宗教上での争いはないと言っても過言ではないだろう。日本人の宗教観は海外から見たら信じられないことだけれどそれと同時に本当に平和なのだ。

宗教問題に絡めて民族についても違いを感じた。日本とインドは大陸と島国でもう1点大きな違いがある。それは言語だ。言語の他にも数々の違いはあるが、私はインドで生活を送る中で英語を話さない民族であるということを痛感した。日本人は日本語を話し、日本語が母国語である。しかしインドではそうはいかず、ヒンディー語が一番話されている言語であるものの共通語は英語なのだ。ある程度の一般教養を終えたほとんどの人達が読み書きをそつなくこなして生活をしており、インドで英語を話せないと言葉の通り話にならないことのほうが多い。

最近の日本では英語教育に力を入れる動きが見られるが私は全く足りないと感じる。インド人は小学校1年生のころからヒンディー語と並行して英語を学んでいるけれど彼らの文化は廃れることはなく、彼らの価値観は変わることはない。それに比べて日本では日本の文化がなくなってしまうのではないかという心配の声があがっている。インドを見て思うのだが英語という言語が入って

くることで得ることはあっても失うものはないと思う。たとえそれが島国であったとしてもだ。世界が様々な面でつながりを持つ現代で英語なしに渡り歩くことは困難だろう。

私はインドで何人かの韓国からきた友達にも巡り会えた。韓国は韓国人学校というものを持たないため現地では現地校かインターナショナルスクールに通わざるをえない。けれど彼らの文化的価値観は損なわれておらず、今や韓国も世界に十分認められた国のうちの1つであると言える。この先これまで以上に国際化が進む中でどのようにして英語を活性化させるのかは日本の大きな課題だ。

そして日本とインドを比較して、もう1点述べたいことがある。それは格差だ。日本に住んでいて自分は裕福だと思ったことは一度もなかった。冷房があり、ベッドがあり温かい食事が食べられ、テレビもあってトイレも付いている。毎日お風呂にも入れてそして何よりも家族がいること。すべて「あたりまえ」のことに見えて決してそうではないのだ。今述べたすべての「あたりまえ」がない人達がインドには何人いるのか想像もつかない。私達日本人が住んでいたいわゆる高級住宅地のような地区のすぐ脇にはスラム街がいくつもある。更にはスラム街にいることもままならず、フライオーバー（陸橋）の下で物乞いをしている人も何人もいるのだ。車の窓を叩いていってお金を乞う。彼らを見れば「物乞い」という言葉を使うことを躊躇してしまう。実際私の周りの友達や先生達も別の言い方を探す。だから先日、日本の友達が何のためらいもなく、笑いながら「お前物乞いかよ」と言った時に心に突き刺さる何かがあった。

また、ある時私が習い事で使っていた更衣室に落ちている大量のゴミを見てインド人の友達になぜゴミをゴミ箱に捨てないのかと聞いたところ、そのゴミを片付ける人の仕事を奪ってしまうからだと答えた。信じられない回答だけれどこれが人口爆発と縦社会の名残がある世界の現実なのだ。インドでIT産業が盛んな理由のひとつもここにある。この制度があった時代のこの国では少し極端だけれど、トイレ掃除はトイレ掃除の係がいて、またトイレのドアを開ける係は別にいるのだ。そんな社会で知識をつければ誰でも上にあがれるIT産業という仕事はインド人にとって素晴らしかったに違いない。私はなぜインドでIT産業が盛んになったかという1つの要因を知って大いに納得した。これは日本では納得しづらい事実である。

数々の「あたりまえ」だと思っていたことが覆される毎日でその事実を受け止められるのが日本人であると私は中学校生活を通して感じた。より良い社会や生活にむけて進んでいくことができるのも日本人であると思う。だからこそ今のこの暮らしやすい日本があるのだ。たしかに最近経済が伸び悩んでいるけれどその中でもやはり秩序を保ち、他人を気遣うことができるのは日本人ならではのと思う。このように、世界に誇れるところがたくさんある国だと「あたりまえ」を通して感じた。閉鎖された環境で限られた民族の中で世界を見ようとするのは簡単なことではないはずである。けれども日本が世界各国と肩を並べることができるのだと4年後に控えた東京オリンピックが物語っている。この日本の俗に言われるジャパン・クオリティーを世界に示すことができるのかと思うとワクワクする。この先に待つ日本の未来を担うのは間違いなく私達なはずであり、そして自分達の行い次第で良くも悪くもなりうるのだ。私が今インドとシンガポールにいて日本を、更には自分をも見直せたのは親がいるからであり、日本でももちろん、インドでは恵まれすぎているこの環境をどう活かして私の今後につなげるかはすべて自分次第だ。経済発展を遂げた日本もまだまだインドから見習える点はあるはずだろう。視野を広くして様々な角度から物事を捉えていきたい。

